ぞ哀れなり。また左衛門が忠のほど、たぐい稀なる勇士なり。

かくて盛長は、思い残る事なしとて、西観音という所へ飛び下り、いかに寄手の人々、聞き給え、兵庫守が腹切ぞ、剛なる者の腹切を見て、己等運命尽き自害せん時の手本にせよ、というよりはやく腹十文字にかき切り臓を取って、たぐり出し、敵の前へ投げ捨て、返す刀を心元に押し立て、朝の露と消え給う。見る人聞く人押し並べて天晴功の者哉、と惜しまぬ者こそなかりけり。

かかる所へ、この殿の牌所、石頭院阿天和尚と申しける、盛長御腹召され候と聞こし召し、同じく瀧へ飛び下り、御死骸を隠しまいらせ、さてこれまでと、盛長御腹切給う太刀を、御口に含みつゝ、うつぶさ（ママ）に伏せ給えば、剣は邪見の物なれば、後へぐっと突き抜きて朝の露と消えにけり。哀れなりける次第なり。

さて、寄手の人々、城中に乱れ入り、城に火をかけ焼き払い、勝鬨作り、湊をさして凱陣し御前に畏り、軍の次第一々申し上げる。君聞こし召され、さても盛長、無益の謀叛をすすめ、家を捨て生害に及ぶ事、無惨なり。そのほか、所々の謀叛人残らず追罰なされける。

かくて数多の合戦に高名したる者どもに、それぞれに恩を与え国穏やかに納まりければ、万民おしなべて悦びける。

三浦左衛門、千代若の御供仕り檜山へ行く事

さてまた、三浦左衛門は千代若殿を抱き参らせ、蝦夷が湊より船に乗り順風に任せ、潟の浦々打ち詠め、程なく大口浜田の浦にぞ着きにけり。それより人目を忍びつつ彼方此方と立ち隠れ、ようようと檜山にこそは着きにけり。

ここに檜山沢の寺、富岳山住持は、御父盛長殿に御所縁のある間、これを頼み申さんと寺へ参り、この由かくと申しければ、住持立ち出対面し、よく来り給うものかな、此方へ入り候えと一間成る所を設え置きまいらせ、能きに労わり給いける。かくてこの人々は憂き年月を送り給うこそ哀れなりけりためしなり。

左衛門尉かねがね若君に申し奉るは、御父御生害の砌、某を御頼み候なり、あわれ、某世に有る内に御世に出し参らせたく存ずるなり、しかしながら定めなきは浮世なり、明日の命も頼み難し、憚りながら、某明日に相果て候とも弓取るは時節を待ち、智謀をもって世に出る事、武略の人と申すなり。命全うする亀は、蓬来山に登るとかや、必ずも御心永くおわしませ、と朝暮の業には文武の二道を進め奉り、安きに暮せ給いける、哀れなりける次第なり。